

(※本文、前ページより続く)

日本粉体工業技術協会は5月27日、東京都文京区の東京ガーデンパレスで第33回定時総会を開き、13年度の事業・決算報告および14年度事業計画・予算案を決議した。さらに今年度は役員改選期に当たり、新たな理事(33人)および監事(3人)による体制に再編。代表理事(会長)に増田弘昭(京都大学名誉教授)、新任の副会長に棚橋純一(常務理事、日本化学工業)を選任した。同協会では公益目的事業活動の柱である分科会活動を中心とする調査・研究事業、月間情報誌「粉体技術」の発行などによる広報・普及事業、教育部門を中心とする人材育成・教育事業、日本工業規格(JIS)、国際標準規格(ISO)などの規格・標準化事業および海外交流事業などを継続的に推進していく。中でも今年度は「ユーザー視点と実際の設計に役立つ分科会活動」「基本技術の継承と発展」「国際粉体工業展2014の目標

日本粉体工業技術協会の14年度事業

重点4項目達成目指す

達成」「ナノ物質への対応・検討」の4項目を活動の重点目標に掲げる。【公益目的事業活動】19の分科会が各々掲げる中期的テーマに基づき活動を展開する。「ユーザー視点と実際の設計に役立つ分科会活動」に向

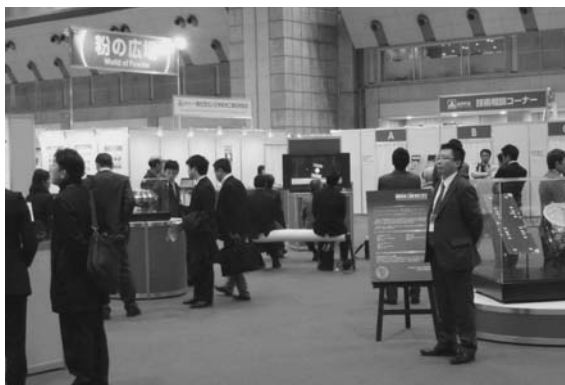
けて、実設計に役立つ定量化が可能なデータを提供、ユーザー・オリエンティッドを活動の柱にする。また微粒子ナノテクノロジー分科会を中心に関連分科会が協力。ナノ物質に関連する技術テーマを抽出し技術探究や研

究開発活動を推進。技術委員会傘下の「技術用語検討委員会」では、冊子「粉体技術用語集(仮題)」の発行を目指す。「ナノ物質検討委員会」では「ナノ粒子安全性ハズレブック」に基づくチェックリストを充実させ

国際粉体工業展東京においてセミナーを開く。【会員共益活動推進】各地域の技術情報交流懇話会(火曜会、4回・水曜会、3回・木曜会、4回・金曜会、3回)を開催し、会員相互の親睦と技術情報交流、人脈形成などの促進を図る。また推薦審査委員会や人材育成委員会などの活動により協会活動の原動力である会員の結束を図る。

国際粉体工業展東京2014

11月26日から3日間



今回の国際粉体工業展東京の会場

東京ビッグサイトで開催

ている。26日には藤井康正(東京大学大学院工学系研究科原子力国際専攻教授)による特別講演「エネ

など注目のテーマごとに各分野から著名な講師が講演する。加えて関連技術の特別展示ゾーンを設け、効果的な情報発信の場を提供する。

さらに粉じん爆発の最新情報やナノ物質暴露防

止技術、粉体シミュレーションなど、業界内で関心が高い課題解決に向けた情報セミナーも併催。最前線の粉体技術を紹介する特別展示「粉の広場」では、若手研究者の研究成果発表や近未来技術を中心とした協会分科会のパネル展示などが予定されている。加えて、人気を集める専門分野の識者による技術相談コーナーも開催する。多彩な企画や情報発信のためのイベントが予定されている。開場時間は10時18時(最終日は17時まで)。入場料は1000円(バーコード登録制、招待券持参者やウェブによる事前登録者および学生は無料)。

粉体技術

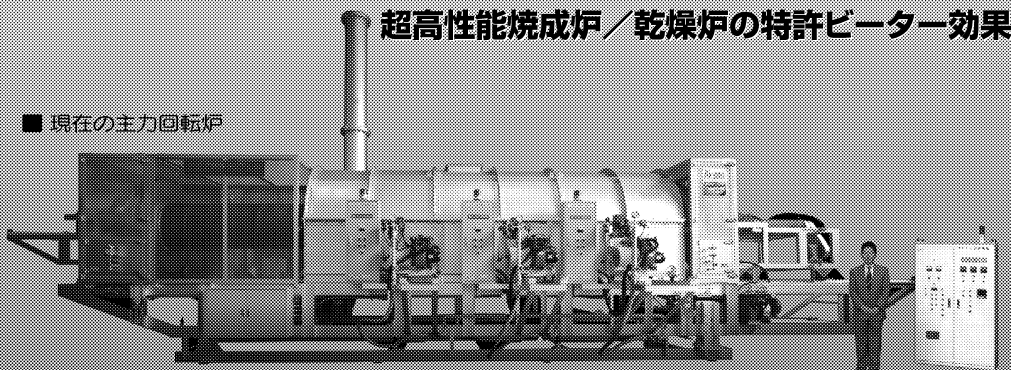
産業界の革新を支える

「この一粒：夢をかたちにした粉の技術」を開催テーマに、最新の粉体技術や関連機器が一堂に結集する。今では、製品・技術の発表の場、市場開拓と事業拡大の場、産学官交流の場として来場者および出展者双方から高い評価を得ている。協会では出展規模の目標値を前回(12年度開催)実績の10%増となる325社・団体、1100小間に設定、積極的な出展募集を展開している。中でも、今回は初回出展者を対象に基本装飾付きトライアルブースを提案するなど新規出展の拡大にも力を入れている。(出展申し込みは7月31日まで)

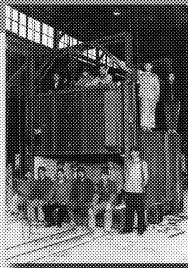
今回の国際粉体工業展東京も話題性の高い併催行事が数多く盛り込まれ

赤見式特許ラジアル炉 (放冷管付)

akami 株式会社 赤見製作所
東京都豊島区高松1-11-15 西池袋MTビル E-mail: akami@akami-works.co.jp
TEL 03 (5965) 2605 (代) FAX 03 (5965) 2602



■現在の主力回転炉

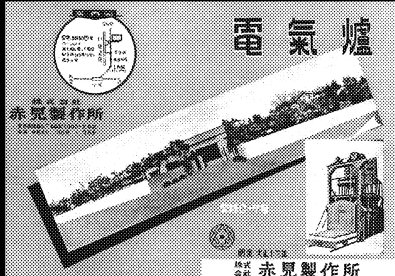


おかげさまで
90周年

■昭和19年日立製作所電工工場 納入

弊社は、大正13年創業より本年で90周年を迎えることができました。これもひとえに皆様方のご支援の賜物と心より感謝いたしております。創業の精神である「独創的技術をもって社会に貢献」を継承しつつ、更に省エネルギー・省資源を標榜し、地球環境に役立つ機器づくりに努めてまいります。

代表取締役社長 赤見 昌彦



■昭和初期当時の製品カタログ表紙

沿革

初代社長 赤見昌一が東京電燈(現 東京電力)を辞し、墨田区向島にて創業した電熱工業界の草分けメーカーです。昭和8年には、日本で初めてジュラルミン溶解用大型電気炉の開発に成功。その後、軽合金・銅合金の溶解炉、トンネル炉、金属の各種調質炉を開発。戦前より大手重工会社には大容量の電気炉を多数導入。近年では赤見式特許ラジアル炉は、超短時間の熱処理と大幅な省エネルギーを特徴とし、現在リチウムイオン電池材料等で大きな成果を上げており、最先端技術の熱処理において多方面に採用されご好評をいただいております。